

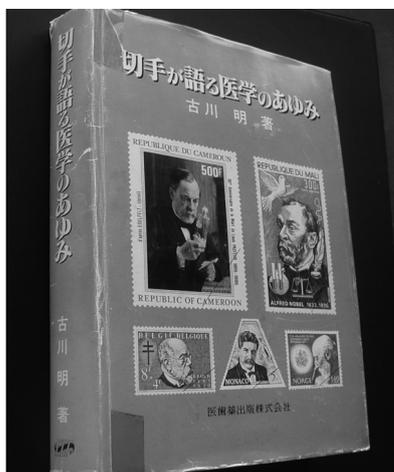
古川明 著「切手が語る医学のあゆみ」 医歯薬出版 1986



沖縄県総合保健協会 金城 忠雄

切手収集にさほどの素養はないが、この本は切手による医学史の話である。膨大な医学に関する切手を示し、著名な医学者の人物像を中心に豊富な話題を提供し、楽しみながら医学の歴史が理解できるようにまとめられている。切手の話としてではなく、医学史として実に面白い。世界には、こんなにもたくさん、医学医療に関する切手が発行されているのかと驚くばかりである。

著者は、外科医、国立大蔵病院副院長、医学切手友の会、日本医史学会員。切手から医学の歴史を詳しく解説している非常に興味深い本である（写真1）。



(写真1. 切手が語る医学のあゆみ)

まえがきに「戦争でおくれをとった日本の医学界は、進歩したアメリカ医学を吸収しようと懸命な努力を重ねていた。日比谷のアメリカ文化センターに各分野の新刊雑誌を供覧していた。たまたまある日、書棚に Medical history in philately (切手のなかの医学の歴史) を見つけた。戦災で収集切手の全てを失いあきらめ

ていたが収集熱が再び沸き起こった。切手を活用して医学の歴史を系統立てて記載したのがこの本である」と。

たまたま、全国公私病院主催で青梅市立病院星和夫院長の案内「医学のルーツを尋ねてギリシャの旅」に同行する機会があった。その旅で、西欧人の文化の基盤が聖書のほか、なかでも医学や医学用語の起源の多くがギリシャに求められることが理解できた。その旅が病みつきになり、現在も「医学の歴史旅」に可能なかぎり参加している。

コス市立博物館には、医聖ヒポクラテスの像の他、医学のシンボル・アスクレピオスの杖や保健の女神ヒギエイアの像がある。博物館の近くに「ヒポクラテスの木」と称するプラタナスの老木があり「医学の木」とも言われている。ヒポクラテスは若い頃、ギリシャ本土での医学研修、武者修行の後コス島に戻り、この木かげで弟子たちに医学を講じたと伝えられている。

私が、かねてより何時かは訪ねてみたいと思っていた現場である。

写真2はそのプラタナスの木である。前に立っている人物がちょっとじゃまですが。

その他、産褥熱のセンメルワイス、ライデン大学の臨床医学教育家ブルハヴェー、ウィーンの大外科医ビルロート、特にミュンヘンの「衛生学の父ペッテンコーファー」は地下水汚染がコレラの原因だと自説を曲げず、コレラ菌を飲んでしまって死にそうになった逸話など医学者の苦勞話しに興味尽きない。

一線で診療している頃は、患者のことが気になり思い悩み眠れぬ夜もあったが、現在はそれ

本の紹介

から解放され気分的に余裕がある。そうはいつでも、医学の歴史を尋ねる旅の計画をしても、2週間の休みを確保するのは大変ではある。

「切手が語る医学のあゆみ」は、580ページの読み応えの有る面白い本ではあるが、欠点は

字が小さく老眼には読むのに少々苦勞することである。

歴史に残る業績、著名な医学者の苦勞とその足跡を訪ねることができるのは、感動的であり、切手収集に興味があれば尚のこと、何時読んでも楽しさと感動を与えてくれる本である。



(写真2. ヒポクラテスの木)

原稿募集！

本の紹介コーナー（1,500字程度）

感動した、生き方が変わった、診療が変わった、新たに真実を知った本等々、会員の皆様の座右の本をご紹介します。